

かかりつけ患者における抗インフルエンザ薬の使用状況に関する研究

Study on use of anti-influenza drugs in regular patients

○宮本 祐亮¹、長井 友香⁷、清水 健司³、柴 拓也⁴、川田 光昭⁵、古田 悠二²、渋谷 見砂紀⁶、河野 有紀^{1,6}、小澤 知博^{4,6}、中野 真⁷、原澤 秀樹⁷、速水 耕介⁷、佐久間 誠^{1,6}

○Yusuke Miyamoto¹, Yuka Nagai⁷, Kenji Shimizu³, Takuya Sakae⁴, Mitsuaki Kawada⁵, Yuji Furuta², Misaki Shibusawa⁶, Yuki Kohno^{1,6}, Tomohiro Ozawa^{4,6}, Makoto Nakano⁷, Hideki Harasawa⁷, Kōsuke Hayamizu⁷, Makoto Sakuma^{1,6}

1. メディホープかながわ、2. ヒューメディカ、3. 川崎協同病院、4. 汐田総合病院、5. 生協戸塚病院、6. 神奈川民医連、7. 横浜薬大

1. Medihope Kanagawa, 2. Humedica, 3. Kawasaki Kyodo Hospital, 4. Ushioda General Hospital, 5. Totsuka Hospital, 6. Kanagawa Federation of Democratic Medical Institutions, 7. Yokohama University of Pharmacy

【目的】2018年～2019年のインフルエンザ流行期は、ゾフルーザ（バロキサビル マルボキシル）の本格的な使用開始やタミフル（オセルタミビル）の10代への投薬制限解除など、例年とは異なる様相を呈すると思われた。そこで抗インフルエンザ薬の使用後聞き取り調査を行い使用成績の実態を後向きに調査した。また、抗インフルエンザ薬が処方された全患者の追加調査を実施し、調査対象者との比較を行うこととした。

【方法】調査実施施設において治療目的で抗インフルエンザ薬を処方された患者のうち、アンケート実施に同意し、後日、直接聞き取り可能な患者（かかりつけ患者（保護者への聞き取り含む））で行った（調査期間は2018年11月1日から2019年5月31日）。調査内容は患者背景（年齢、性別など）、使用薬剤、主症状、主症状が緩和した日、有害事象、コンプライアンス、治療満足度、他とした。調査期間の処方状況は処方元レセプトデータを用いて抽出した（年齢、性別、使用薬剤）。

【結果と考察】アンケートの回収は980件であり、調査対象者の年齢構成は70歳以上が264件で最も多く、次いで10歳未満が213件であった。使用薬剤はタミフル440件(45%)、イナビル313件（32%）、オセルタミビル後発品120件（12%）、ゾフルーザ84件（9%）、リレンザ23件（2%）であった。各薬剤使用者における平均罹病期間は、タミフル3.16日、イナビル3.34日、オセルタミビル後発品3.00日、ゾフルーザ3.13日、リレンザ2.47日であった。インフルエンザ治療の満足度は、イナビル、オセルタミビル後発品、タミフル、ゾフルーザではほとんど差が見られなかったがリレンザでやや高い傾向が見られた。本調査はかかりつけ患者が多数を占めているため、レセプトデータ等の結果も含め調査対象者の背景に留意しながら評価を行った。